

## ムゥーイ、に揺られて

温又柔 小説家

青森の、それも八戸には、いつか、必ず行ってみたいと焦がれていました。はちのへ、はちのへ……いや、より正確には、はちのへ、はちのへ……の方がいいのかな？

私がことさら八戸を意識し始めたのは、言うまでもなく、木村友祐さんがきっかけです。

第33回すばる文学賞で、木村さんが大賞を、私が佳作を貰ったのは2009年のこと。その年の「すばる11月号」で私は「海猫ツリーハウス」を読み、青森の、南部弁の、八戸のことばが文字になって、堂々と佇むのを目の当たりにし、感動を覚えたのでした。(私にとってさらに特別だったのは、その同じ雑誌にすばる文学賞のその年の佳作として「好去好来歌」も載っていたことです)。小説といえば、方言ではなく標準語で書くべきであるという規範を食い破るように、ご自身の故郷でしかと響く南部弁を放り込んだ木村さんの作品が、強く私の胸をうったのです。声が滲むこの文章の魅力を生み出した八戸とは一体、どんな土地なんだろう？

2016年、冬。ほかでもない木村さんに誘われて、小説家の石田千さん、詩人の管啓次郎さんと一緒に八戸ブックセンターのオープニング記念イベントに参加することになった時は、いよいよ八戸に行けるんだと胸を高鳴らせました。

あの日、私は「ムゥーイの誘惑」と名づけたテキストを読みました。

種明かしすると、ムゥーイ、という響きとは、母語、を、中国語で読んだときの音です。「母国語」が所属する国家を前提とした言語であるなら、そこから「国」が外れた「母語」はもっと原初的なものではないかと私は考えています。

母国語が、学校の国語の時間に学ぶ言語であるとすれば、母語は学校から遠く離れた、もっと原始的な、ヒトが赤ん坊としてこの世に生を受けてすぐに、その母親や母親代わりのおとなたちから聞かされることば。

だから私は自分の母国語は学校で教わった日本語だけれども、母語の方は<sup>ムゥーイ</sup>といえば、中国語と台湾語がふんだんに織り交ざったニホン語なのだと思って生きています。

八戸で過ごしたあの日、私はそっと試してみました。はちのへ、はちのへ。この響きが木村さんや仲間たちの母語だと思つと、胸がときめきました。

母語を、だれに押し付けられたものでもなく、そのひと自身のことばを意味することばと解釈すれば、同じ日本語と呼ばれる言語でも、それを使って生きている人の数だけ、標準的だとみんなが

思い込んでいる日本語とは異なる「母語を基盤にしたことばがある。たとえば、標準語に置き換えたら消滅しかねないリアリティや、熱を伴う土地のことば。そういった、土地から切り離しようのないことばが、日本じゅうのあちらこちらでいまこの瞬間も確かに響き合っているはず。

木村さんに導かれて、訪れることの叶った八戸の、とってとても素敵な本屋さんのハンモックに揺られながら夢見心地でそう確信した時間の幸福感ときたら……それを思い出すたび、私をうっとりさせたのはハンモックだけでなく、本を求め、本を読み、本を楽しみ、本を愛おしむひとたちが、自分自身の世界を深く掘り下げる時空間をたっぷりと提供してくれた八戸ブックセンターそのものだったんだなあ、と感じるのです。

**温又柔** wen yuju

小説家

オープニング記念イベント「土地と声」(2016)

1980年台湾・台北出身。3歳より東京在住。法政大学国際文化学部在学中は、司修のもとで美術と創作を学ぶ。2009年『好去好来歌』ですばる文学賞佳作を受賞しデビュー。著書に『台湾生まれ 日本語育ち』（白水社）、『真ん中の子どもたち』（集英社）など。

